

1 言語を複数の異なる文字で表記する貨幣銘文の出現

吉池孝一

1. 序言

紀元前2世紀前半にインド西北の地においてギリシア系のバクトリア王国より二言語併用の銘文を持つ貨幣が発行された¹。この二言語併用という新たな貨幣様式は周辺の地に伝播し後代に伝わったわけであるが、二言語は異なる二種類の文字で表記されるのが普通であり、一種類の文字で表記する例は管見によるかぎり知らない。モンゴル人が支配者となった元朝に至ると、これまでの二言語併用貨幣とは異なる形式の銘文が出現する。一言語を複数の異なる文字で記す銘文を持つ貨幣が現れたのである。このような貨幣様式は、元朝の国字であるパスパ文字の性格と関連がある。パスパ文字はモンゴル語だけでなく、元朝支配下の複数の文字言語を表記し、しかも諸言語を記したもとの文字と併用することを前提として作られた文字である。この文字の出現により1言語を複数種の文字で表記した貨幣銘文が可能となったのである。貨幣銘文の実例を検討する前に次節においてパスパ文字の性格を確認する。

2. パスパ文字

パスパ文字はフビライの命のもとチベット僧パスパによって作られたものとされる。この文字につき、『元史』列伝の卷第八十九“釋老”に引用する至元六年のフビライの詔には次のようにある。

朕惟字以書言，言以紀事，此古今之通制。我國家肇其朔方，俗尚簡古，未遑制作，凡施用文字，因用漢楷及畏吾字，以達本朝之言。考諸遼金，以及遐方諸國，例各有字，今文治寢興，而字書有闕，於一代制度，寔爲未備。故特命國師八思巴創爲蒙古新字，譯寫一切文字，期於順言達事而已。自今以往，凡有璽書頒降者，並用蒙古新字，仍各以其國字副之。

朕惟(おも)うに、字は言を書し、言は事を紀す。これ古今の通制なり。我が国家 朔方に基礎を確立してより、その風俗は簡潔古雅をとうとび、いまだ文字の制作にいとまあらず。およそ施用の文字は、漢字および畏吾(ウイグル)字を用い、よつて本朝の言語を表達しきたる。これを遼・金および遠方の諸国に考うるに、おおむね各国文字を有す。いま我が国の文治ようやく興り、しかも字書を缺くは、一代の制においてまことに不備なりとせり。故に特に国師八思巴に命じて始めて蒙古新字を制作せしめ、一切の文字を訳写せしむ。順言達事を期せんとするのみ。自今以往、璽書の發布するものみな蒙古新字を用い、かさねて各々その国字をもつてこれにそえよ。²

¹ ヒンドゥークシュ山脈を越えてインドの西北に進出したデメトリオス1世の息子には、デメトリオス2世(前180-前165)、アガトクレス(前180-前165)、パンタレオン(前185-前175)の三人がおり、それぞれの王名の二言語併用貨幣が発行された。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティエー文字によるものであり前田耕作(1992:161頁)によるとこれは2世の発行に係るといふ。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある。

² 訳文は野上(1978)による。

ここで言う“譯寫一切文字”とは、第一義的には、パスパ文字以外の文字で書かれた諸文書をパスパ文字の文書に変換するということである。もっとも、パスパ文字に習熟した後には直接に周辺諸民族（モンゴルからみて）の言語を記す場合があったかもしれない。しかしながら、それは二義的なことである³。このようにしてパスパ文字に“譯寫”された文に、本来の文字で書かれた文を添えろとしている。これは1言語を2種の文字で記すことを指示したものであから、これによって1言語を複数種の文字で表記した貨幣銘文が可能となったのである。

3. 元朝のパスパ字漢語貨幣

これはモンゴル人支配下の元朝の貨幣である。表に漢字で至正通寶とある。至正年間即ち元代最後の皇帝である順帝(トゴンテムル)のときに発行された貨幣であり、裏には十二支のパスパ文字漢語の紀年がある。



①は ylin(寅)とある。至正 10 年庚寅(1350 年)発行。②は m(a)v(卯)とある。至正 11 年辛卯(1351 年)発行。③は šlin(辰)とある。至正 12 年壬辰(1352 年)発行。④は zhi(巳)とある。至正 13 年癸巳(1353 年)発行。⑤は u(午)とある。至正 14 年甲午(1354 年)発行。至正年間に紀年が「寅卯辰巳」と連続する時は、至正 10-13 と至正 22-25 があるが、この貨幣は前者に発行されたものである⁴。

³ 以上は吉池孝一(2009b)による。

⁴ 元史卷 92 志第 41 下百官八には「諸路寶泉都提舉司， 至正十年十月置。其屬有鼓鑄局， 正七品；永利庫， 從七品。掌鼓鑄至正銅錢， 印造交鈔。」とあるから至正 10 年から「寶泉都提舉司」で至正錢の鑄造を始めたことがわかる。さらに、元史卷 43 本紀第 42 順帝六の 14 年 12 月の条に「罷庸田、茶運、寶泉等司。」とあるから至正 14 年に「寶泉都提舉司」を廃止したことがわかる。この廃止にともない至正錢の鑄造も取りやめとなったと推定することができる。以上の元史の記述により至正通寶裏のパスパ文字漢語の「寅卯辰巳」は至正 10-13 のものということになる。

この貨幣は、漢語を漢字とパスパ文字という異なる文字組織を使用して表記したもので、1言語を2種の文字で表記した銘文をもつ。伝統的な2言語を2種の文字で表記した所謂二言語併用貨幣とは異なる。このような1言語2種文字の貨幣がなぜ現れたかということが問題となろう。それはパスパ文字の性格と関わる。パスパ文字は、元朝支配下の様々な言語をパスパ文字で表記することを意図して作られた文字である。一つの文字で数種の言語を表記した例は少なくないが、それは他の民族が文字を借用した結果であって、パスパ文字のように、最初から複数の言語を一つの文字で記すことを意図した文字は管見によるかぎり他に例を知らない。歴史上これが最初の試みではなかろうか。もっとも、後代には類似の性格を有する文字として清朝の満洲文字がある。この満洲文字については4節で触れる。

4. 元朝の“四体字錢”

これは元朝の方孔円形の銅錢である。記念貨幣であり一般に通行したものではない。



表



裏

表には、漢字・漢語で“至元通寶”と年号が記されている。至元年間は、世祖フビライ時代の1279-1294年および順帝(トゴンテムル)時代の1335-1340年がある。寺澤知美(2003)は後者とする。裏には、四種の文字で年号が記されている。寺澤(2003)によると、上はパスパ文字で *ji*(至)とあり、下はウイグル文字 *ywn*(元)の可能性があるという。右はアラビア文字 *tung*(通)、左は西夏文字 *pa*(寶。文字の意味は“波”)。至元通宝の漢語音を表記しているとする。これは1言語を5種の文字で表記した貨幣ということになる。この銘文は、文字を“併用”するのではなく“漢字仮名交り文”のように文字を“混用”して一つの言語を表記したものである。なおこの貨幣のように異なる種類の文字を混用する例は元朝の印章にもみられる。私は二言語併用貨幣や至正通寶のように一言語を複数の文字で表記する資料を“異種文字併用資料”と呼び、四体字錢などの資料を“異種文字混用資料”と呼ぶことにしているが、後者の存在はモンゴル時代の文字資料の特徴ともなっている。

5. 清朝の満洲文字漢語貨幣

満洲文字は、パスパ文字と同様に言語と文字との結びつきが比較的緩やかである。パスパ文字のようにそれと明言はしていないが、満洲語以外の言語の表記をも視野にいたした文字とみてよいであろう。近代以前において、外国人用のラテン文字やハングルを除き、漢語を体系的に表記した表音文字は元朝のパスパ文字と清朝の満洲文字のみである。

ここに挙げた資料は清の康熙通寶である。康熙年間(1662-1722)に発行された鑄造による方孔円形の銅貨。表には、漢字・漢語で“康熙通寶”と年号が記されている。裏には、右側に漢字で“河”とあり、左側に満洲文字で ho とある。ho は“河”の漢字音であり局とよばれる貨幣鑄造所を指す。元朝のパスパ文字漢語と漢字漢語の至正通寶と同様に、満洲文字漢語と漢字漢語の1言語2種文字貨幣である。



表



裏

6. 結語

モンゴル人支配下の元朝において、1言語を複数種の文字で表記する貨幣銘文や漢字仮名交り文のように1言語の表記に当たって複数種の文字を混用する貨幣銘文が出現した。この新たな銘文の出現は元朝に作られ使用されたパスパ文字の影響とみて大過ない。パスパ文字はチベット仏教の僧侶であるパスパが、チベット文字を角ばらせてつくった表音文字で、アルファベットのようないくつかの文字のセットからできあがっている。このパスパ文字を用いて、モンゴル語だけではなく元朝支配下の様々な言語を書き付けた文書を“譯寫”すなわち表記しようとした。パスパ文字で書いたもののうち現在見ることのできる資料に、モンゴル語、漢語、テュルク語、サンスクリット語、チベット語がある。これは文字の歴史において特異なことである。ラテン文字のように様々な言語に借用された結果複数の異なる言語を表記することになったという例は珍しくはないが、パスパ文字のように文字を作成する当初から複数の言語を表記することを目的の一つとし、現に複数の言語が表記されたという例は稀である。或いは文字の歴史上初めての試みであったかもしれない。1言語を複数種の文字で表記する貨幣銘文の出現や1言語の表記に当たって複数種の文字を混用する貨幣銘文の出現は、パスパ文字の特異な用法の上に可能となったものである。

ふつう言語と文字の結びつきは固いのであるが、パスパ文字の場合は言語との結びつきが緩やかなものとなっている。これはおそらく、さまざまな民族の交流があったモンゴル時代の全体を覆う雰囲気を体現したものであろう。

【参考文献（発行年順）】

野上俊静(1978)『元史釈老伝の研究』朋友書店。

新疆錢幣圖冊編輯委員會(1991)『新疆錢幣』新疆美術攝影出版社・香港文化教育出版社。
前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(レグルス文庫)第三文明社。
デイヴィド・モーガン著 杉山正明、大島淳子訳(1993)『モンゴル帝国の歴史』角川選書。
寺澤知美(2003)「四体字錢 至元通寶」『KOTONOHA』第12号,10-11頁。
吉池孝一(2009b)「至元六年フビライ詔書中の譯寫一切文字について」『KOTONOHA』第80号,32-36頁。

*本稿は平成25年-平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25370488「遼金元清文字資料の研究—電子データ化を中心として—」の助成による成果の一部である。